
ツチノコの山

ミヨ介

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ツチノコの山

【コード】

N1815E

【作者名】

三三介

【あらすじ】

高校生の石川明、浮田瞬、中島美奈、西谷瞳の四人はある一枚の写真をきっかけに、近所の山へツチノコを探しに行くという物語。

第一話

高校三年生の夏休みだった。実質的には夏季補習がほぼ毎日のようにあったので、休みとは言えないものだったが。

「ツチノコを探しに行こう」

中島美奈が一枚の写真を見せながら、そう言った。彼女の持っている写真には一匹の奇妙な生き物が写っている。ほかの三人は、それを覗き込んだ。ほかの三人というのは、美奈のクラスメイトで、石川明、浮田瞬、西谷瞳の三人だ。彼らはよく四人で遊んでいる。

「その写真、本物？」

瞬が疑い深げな目で美奈の顔を見る。美奈は本物よ、と怒ったような声を出した。端正な顔が、わずかに赤みを帯びる。まずいことになったかも、明は心の中でつぶやいた。しかし、それは表情には出さない。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。私はツチノコ探し、おもしろいと思うけど」

瞳が二人の間に入った。のんびりとした声だ。明も、瞳に同調して瞬と美奈の間に流れる険悪な空気の仲裁を買って出た。

「僕もせっかくだから、行ってみるのはいいと思うよ」

三対一、こうなっては瞬も美奈の意見に従わざるを得ない。こうして彼女の意見が多数決で通った。

「それじゃ、今度の日曜日、朝九時にいつもの公園で待ち合わせね」

美奈が意気高々と言う。いつもの公園というのは、彼ら四人がいつも遊んでいる、学校の近くの公園のことだ。

第二話

三日後の日曜日。約束の日がやってきた。明と瞬は並んで自転車をこいでいる。

「明はさ、ツチノコなんていると思う？」

「いないような気がするけど、どうなんだろう。分からんね」

「いや、絶対にいないって」

瞬の言い方はかなり断定的だ。明は、そこまで断定してしまつていいのだろうか、と疑問を感じた。というより、意見を聞くつもりがないなら初めから訊くなよ、と思った。しかし、相変わらずその気持ちは顔に出さない。ポーカーフェイスを保ち続けた。

二人の間で言葉が途切れた。そして、公園が見えてきた。

「二人とも遅い！もう私たちは三十分も待つてるのに」

美奈が叫んでいる。明と瞬は顔を見合わせた。美奈の言い分がおかしいことは考えるまでもない。明たちが公園に到着したのは九時前だったからだ。

「どうせ瞬は行きたくないからわざと遅れたんでしょ」

明には瞬が必死に怒りをこらえていることが手に取るように分かった。その額には青筋が浮かんでいる。

「中島さん、そういう言い方はないんじゃないのかな」

このままいくと、本当にやばいことになりそうだと感じた明が口を挟んだ。しかしその努力は美奈にあっさりとは無視されてしまった。「それに、別に遅刻したわけじゃないしさ。むしろ、中島さんたちが早く来すぎたのがよくないんじゃない？」

明はあきらめない。さらに食い下がる。しかし、暖簾に腕押しとはこのようなことを言うのだろうか、美奈はまったく意に介した素振りを見せない。

「美奈ちゃん、早く行こう。瞬君と明君も」

鶴の一声だった。それまで黙っていた瞳が口を開くと、美奈も瞬

もはつとしたような表情をした。そして、ツチノコを探しに行くという目的を思い出したのだろうか、険悪な空気は一変、そばからでも彼らの怒りが消えていくのが分かった。

明は心の中で首をかしげる。どうして、僕が言つと何も聴いてくれないのに、西谷さんが言つと丸く収まるのだろうか、と。

「そうだったね。ごめんね瞬。また絡んじやったね」

「もういいよ」

瞬と美奈の間に正式な和解が成り立った。明の心の中の疑問もあっさりとしぼんでしまった。

「ツチノコ探しにしゅっぱーっ！」

「おー！」

美奈の掛け声に合わせて三人はこぶしを天に向かって振り上げた。豊橋の町で青春を謳歌する彼ら四人を石巻山がやさしく見つめている。

第三話

こうして明たちは美奈を先頭に、ツチノコ探しの旅に出た。旅といつても近所にそびえる石巻山に行くだけだが。しかし、これが危険極まりない冒険になるうなんて、この四人のうちの誰一人として予想できていなかった。

「この写真、どの辺だと思う？」

自転車をこぎながら、美奈が誰にともなく話しかける。

「蛇穴の周辺じゃないかな」

写真の風景に見覚えのあった明が答えた。

蛇穴というのは、一種の小さな洞窟だ。それもまったく光の入らない洞窟だ。瞬、美奈、瞳の顔にかすかだが動揺の色が走った。

「懐中電灯とか俺、持ってないよ」

「わたしも」

まず瞬が懸念を口にし、続けて女子二人が同調した。

「大丈夫、念のため僕が持ってきたから」

明が胸を張って言う。他の三人は意外そうな顔をした。

「珍しく準備がいいじゃん」

一同を代表して瞬が感心の声を上げた。珍しくは余計だって、明は心の中でばやいたが、やはり顔には出さない。口にも出さない。曖昧に笑っただけ。

「ここからは歩こう」

山のふもとに着くと、美奈が言った。そこで四人は自転車を降りて歩き始める。

「なんか探検隊みたいだね」

「みたいじゃなくて、実際そうなの」

瞳と美奈の会話だ。明と瞬は黙々と歩いている。

水の音が聞こえる。近くを川が流れているのだ。明はなんとなくドキドキしてきた。本当にツチノコがいるような気がする。

「本当にツチノコいるかもね」
思わず口に出していた。

「そう思うでしょ。さすが明君。誰かさんとはぜんぜん違うわ」
美奈はそう言っつて、嫌味満点の目つきで瞬をちらりと見た。その
皮肉に気づいたのか、瞬は苦虫を噛み潰したような顔をしている。
「この辺じゃない？」

瞳が言った。三人はその声につられて周囲を見回す。緊張が四人
を包む。

「本当だ。ここ、ここ。絶対ここだよ」

写真と景色をじつと見比べていた美奈が、突然うれしそうに叫ん
だ。まるで目的のツチノコを見つけたような言い方だが、実際には
何もいない。閑散としている。

「でも、どこをどう探せばいいんだよ」

瞬が、ぼそつとつぶやく。

「多分、あの蛇穴の中にいるんじゃない？」

明が答える。確信はなかった。しかし、なんとなくそんな気がし
た。

そこで一行は蛇穴の中に入ることになった。

中は真っ暗だった。光がまったく入ってこない。明の懐中電灯が
大いに役立った。これがなければ、入っても一歩も進むことができ
なかつただろう。

ピチャツ。ピチャツ。

天井から水が滴り落ちている。静寂の中、水の音だけが響いてい
る。明は背中に冷たいものが走るのを感じた。

第四話

「あつ」

突然視界から光が消えた。四人を恐慌が襲う。懐中電灯の電池が切れたのだ。

「みんな、落ち着け。とりあえず手をつないで、壁に触りながらゆっくり歩こう」

瞬がとつさの機転で提案した。三人もその意見に従う。やがて、前方に光が見えてきた。

「多分、あそこが出口だ」

瞬に言われるまでもない。おそらく、誰もがそう思っていただろう。四人は安心のあまり、力の抜けた気持ちで歩き続ける。

しかし彼らの前に現れた光景は信じられないものだった。そこには、いるはずのない伝説上の生き物たちがたくさんいたのだ。ペガスス、ユニコーン、フェニックス等等。

「夢じゃ、ないよね」

瞳が呆然とした声でつぶやく。瞬はまじめな顔をして自分の頬をひっぱたいている。美奈は口をぽっかりと開けたまま、その場に立ち尽くしている。そして、明はそんな三人を眺めながら、目の前に広がる光景を割りとおっさり受け入れられたことに驚いている。

「やっぱり、夢じゃないみたいだ」

瞬があきれたように声を漏らした。誰もその声に答ええない。生き物たちの声だけが、彼らの中に存在するほとんど唯一の音だ。沈黙が四人を支配する。

と、瞬が口を開きかけたときだった。

「ねえ、せつかくだからもう少し奥に行ってみない？」

美奈が明るい声で言った。その声にも誰一人として反応しない。

「みんな、どうしたのよ。こんなの、絶対に学校じゃ経験できないよ」

当たり前じゃないか、ここは僕たちの住んでいる世界とは違うんだから、明の中の誰かが言った。彼だけにはその声はつきりと聞こえる。

「ねえ、行こうよ」

まるで、駄々をこねる赤ん坊だ。美奈は執拗に三人に迫る。

「おまえ、頭狂ったんじゃないのか？こんな変な所、さっさと出るのがいいに決まってるじゃねえか」

ついに瞬が美奈に鉄槌を下した。必要以上に高い声だった。明も瞳も、瞬の意見に賛成する態度をそれとなく示す。

「帰るぞ」

瞬はそう言うと、そのまま歩き出した。元の洞窟の中に戻る。明たちも慌ててその後を追う。しかし、まだ三人とも一人足りないことに気づいていなかった。というより、洞窟、つまり蛇穴は真っ暗だった。そのため、互いの顔すら確認できない。

「全員いる？」

瞬の声がする。

第五話

「石川明、います」

「西谷瞳、います」

「そんな言い方しなくても」

二人の畏まった言い方に、瞬の声は苦笑する。

「あれ、美奈は？」

しかし、すぐに三人は異変に気づいた。彼らの耳に美奈の声は入ってこない。

「あの馬鹿」

瞬は悪態をつく。だが、すぐに引き返そうと二人に言った。もちろん、明たちに異存があるはずがない。

そのとき、鋭い悲鳴が蛇穴の中にまで聞こえてきた。美奈の声だ。三人は今歩いてきた道を光に向かって手探りで歩き出した。暗すぎるため、走りたくても走れない。

周囲が明るくなる。三人の歩く速度は次第に速くなってきた。やがて、小走りになる。再び彼らは不思議な世界に入った。しかし今度は奇妙な生き物たちを観察する余裕はない。

「多分こつちだ」

瞬が二人を先導するように走る。明も美奈の無事を祈るような気持ちだった。おそらく瞳も同じ気持ちだろう。

「いた」

いち早く美奈に気づいたのは瞳だった。

美奈の正面には八つの頭を持つ怪物が立ちふさがっていた。ヤマタノオロチだ。明と瞳が美奈の許へ駆け寄りとうとすると、瞬に引きとめられた。

「今、行っても無駄だ。みんなであいつに食われるだけだ。さいわい、あいつには動かないものが見えないみたいだから、下手に動かないほうがいい」

「どうして分かるの？」

瞳が不満そうに尋ねる。

「だって、ほら。あいつの首を観察すると、動くものにしか反応していないだろう。それにティラノサウルスも動くものしか見えな
いらしいし」

どうしてここでティラノサウルスが出てくるのか、明には疑問だ
ったが、瞬の言うことはもっともなことに聞こえた。というよりも
こんな短時間でここまで観察している、彼の鋭さに驚いた。瞳も同
じことを思ったのだろう、納得したように瞬の言葉にうなづく。

「でも、どうやって中島さんにそのことを伝える？」

明の言葉に、二人は首をかしげる。彼らにも打開策が見当たらな
いのだろう。早くこの状況を何とかしなくては、という焦りが三人
を襲う。

「こうしよう。俺があいつのそばに石を投げる。それで、あいつが
それに気をとられている隙に明、お前が美奈のところに行ってくれ。
ただし、すぐに逃げようとするんじゃない、二人でじっとしてる
んだ」

頭をひねった割には、瞬の意見は月並みだ。しかも、下手をする
と自分が犠牲になるかもしれない、と明は思った。でも、そうする
しかないということも、同時に彼は思った。

「分かった」

短く答える。瞬は軽くうなずくと、石をすばやく拾い、手首にス
ナップをきかせて下から投げ上げた。怪物の八つの首がすべて石の
ほうを向く。明はその瞬間を逃さなかった。美奈のそばに駆け寄る。
そして、瞬から言われたことを手短かに説明した。

「うん。でも、このままじっとしてても、あの化け物に気づかれる
のは時間の問題だと思うけど」

美奈が消え入りそうな声で言う。明はいつもの彼女の強い口調を
思い、すこしかわいそうな気持ちになった。

「瞬が何とかしてくれるから、大丈夫だよ」

明は美奈を励ますというより、自分に言い聞かせるように言った。実際、明にも逃げ切れるという確信があるわけでもなかった。そのとき、怪物の体が傾いた。音を立ててバランスを崩したのだ。とっさに、「逃げろ」と言っつて、明は美奈の腕を引っ張り、駆け出していた。

第六話

四人でかたまっで走る。まったく振り返らない。そういう気持ち的な余裕もなかった。

どのくらい走ったのだろうか。

「もうここまで来れば大丈夫だろう」

瞬が息を切らせて言う。四人があたりを見回すと、いつの間にかヤマタノオロチの姿は消えていた。しかし安心するのも束の間。明たちは蛇穴から明らかに離れた場所にいたのだ。

「あれ、これってもしかしたら帰れなくなっただってことじゃない？」

瞳が四人の不安を代弁するようにして口に出す。瞬も美奈も、顔から血の気が引いている。明も背筋に悪寒が走った。

「美奈、お前のせいだぞ」

「何よそれ、瞬がこつちに先導したんじゃない」

「元はといえば、お前が一緒に戻らずに変な所にいるから悪いんじゃないか」

美奈が黙り込む。しかし、その顔からは、あまり反省している様子は伺えない。瞬もつられて口をつぐむ。

「あのさ」

「ねえ、とりあえず歩きましょう。こんなところでじっとしていても仕方ないし」

二人の間に気まずいものが流れ始めたのを察して明が言いかけると、瞳がその先を続けた。そうだな、と瞬。美奈は、まだ不服そうな顔だったが、三人が歩き始めると、小走りで後についてきた。

そのときだ。落とし穴のようなものに四人は、はまってしまった。

「うわあ、落ちるー」

明の間拔けな声が穴いっぱいに響く。どこまでも四人は落ちていく。

「あ、止まった」

美奈が言う。安心したような声だ。まだ安心するのは早いような気がするけど、明は心の中で逆に不安になった。なんといっても、まず真つ暗なのだ。

「気をつける。何か来るぞ」

瞬の小さく押し殺した声がある。明の不安が、的中してしまったようだ。本当に、何者かの気配がある。

光る二つの玉。明の背に悪寒が走る。四人の中に緊張が走る。

「あれ、もしかしてツチノコじゃない？」

次第に暗闇にも目が慣れてきたあたりで、美奈が言った。どこか嬉しそうな声だった。

ずんぐりむっくりした体。つぶらな瞳。そして、蛇のような頭と尻尾。どこをどう見てもツチノコだ。

第七話

「あなたがたが来るのをお待ちしておりました」

ツチノコの声だろうか。機械的な声だ。

「コイツ、しゃべれるのか？」

瞬が言う。

「はい、まあ一応」

やはりツチノコだ。

「説明はあとにして、こつちに来てください」

明たち四人は、ツチノコに先導されて穴の中を歩いた。

「ねえ、なんかコイツ、怪しくない？」

ツチノコ探しを最も強く主張していたはずの美奈が、瞳に話しかける。先ほどまでの嬉しそうな声が嘘のような口調だ。

「どこまで行くの？」

明がツチノコに尋ねる。どんなときも状況をあっさりと飲み込んでしまうのが、良くも悪くも彼の特徴だ。今回もそれが現れた。

「はい、まずトウリスト湖に行きます」

「どこそれ？」

今度は瞳だ。

「どこって言われても困るのですが……。でも、湖です。いつも深い霧に覆われているところですよ」

「そこに行つて、どうするんだ？」

瞬が会話に割り込む。

「その霧を晴らしてもらいます」

そんなことできるのか、明は不審に思った。しかし、あまりにもあっけなくツチノコが言うので、訊くのはばかられた。

「ねえ、そんなことできるの？」

美奈はなぜか明に訊いてきた。ツチノコに言えよ、明は思ったが口には出さない。その代わりに、分からないとだけ答えた。

「どうやったら、そんなことできるんだ？俺たちは普通の高校生なんだぞ」

「いやあって、瞬が疑問を口にする。美奈とは違って、彼の場合はツチノコに直接尋ねる。」

「あなたたちの世界では普通だったかもしれませんが。しかし、この世界では、あなた方は普通ではないのです」

「ツチノコは妙なことを言う。あれやこれや話しているうちに、私たち一行は目的の湖に到着してしまった。本当に、湖はすっかり霧に覆われている。何も見えない。」

第八話

あたり一面に、低いうなり声が響いている。船の汽笛のようにも聞こえる音だ。

「ねえ、なんか聞こえるよ」

美奈が泣き出しそうな声で言う。

「見つかると、まずいことになるので、見つからないようにしてください」

「ちよつと待って。見つかるって、誰に見つかるの？誰かいるの？」

「あなた方にとって、敵となるものであるとだけ言っておきましょう」

謎かけのようなことをツチノコは言う。美奈の瞳には、ますます不安の色が浮かぶ。

「で、俺たちはここで何をすればいいんだ？」

瞬の言葉だ。彼は常に本質を見ようとしている。

ツチノコはなぜかここで、口を閉ざしてしまった。何だよ、ここまで連れて来ておいて、明は心の中で、ひとりごちる。

一行の耳に入る音が、謎のうめき声だけになってしまった。

不気味な時間が流れる。誰も何も話さない。霧は、少しだけ薄くなっているように見える。

「さあ、皆さん。こっちです」

いつの間にも移動していたのか、ツチノコが四人と少し離れた所から呼びかける。明たちは、何が起きたのか、よく把握できぬままツチノコの傍に駆け寄る。

そこには巨大な石が安置されていた。

「この石をどかしてください」

ツチノコだ。その言葉に、瞬が真っ先に反応した。石を両手で抱え、持ち上げようとする。顔を真っ赤にしている。しかし、石はまったく動く気配を見せない。

「なんだ、これは。重すぎるぞ」

瞬は相変わらず、諦めが早い。ヤマタノオロチと対峙したときの粘り強さが嘘のようだ。

自然の流れから、明が石と格闘することになった。しかし、やはり石は、うんともすんとも言わない。続いて、美奈と瞳もそれぞれ石に挑戦をする。が、結果は同じだった。

「俺たちには無理だ。おい、ほかに何か方法はないのか？」

瞬がツチノコに聞く。聞くと言うより、詰問すると言ったほうが良いかも知れない。

「ありません。なんとかして、この石を動かしてください」

取り付く島もない。ツチノコはそんな口調で言った。

うめき声の数が、次第に多くなってきた。気がつく、四人の側からツチノコは消えていた。

「あの、馬鹿蛇め。どこに消えやがったんだ」

瞬が悪態をつく。その声からは焦りが滲み出していた。

「ねえ、私たち、もしかして取り囲まれたんじゃない？」

美奈が言う。確かにそう言われてみると四方から声が聞こえるよ。うな、明はそうつぶやいた。瞳は不安と戦うように、じっと押し黙っている。

「よし、とりあえずこの石をどかさぞ」

瞬が無謀なことを言う。言うだけではない、彼は再び石に組み付いた。

ほかの三人は、ただ見ていることしかできない。

「なにやってんだ。手伝えよ。一人じゃ無理でも、四人で力を合わせればできるかもしれないじゃないか」

「なるほど」

瞬の言葉に相槌を打って、明も石に組み付く。

うめき声が少しずつ、近づいてくる。

「早く」

瞬が、残りの二人に懇願する。もう時間がない。

「でも、霧が晴れたら私たちは襲われるんじゃないの？」

瞳が言った。美奈も、うなずいている。

「どうせ、晴れなくても襲われるよ」

瞬が珍しく投げやりな口調で言う。その声にはツチノコへの怒りが込められているように、明は感じた。

第九話

瞳と美奈は顔を見合わせる。瞬の言葉が理解できていないようだ。人は、認めたくないものにぶつかると、自然と思考回路を閉ざしてしまふ生き物なのかもしれない。

「早く、手伝ってくれよ」

瞬が苛立ちを百パーセント声に込めて言う。

「早く、早く」

明も藁にもすがるような気持ちで言う。

どンドン包囲の輪は締められていく。

瞳と美奈は互いにうなずきあい、石を抱えようとした。石は頑固に動かない。

「もうダメ。こんなの無理よ」

「無理なもんか。最後まであきらめるな」

美奈の泣き言を、瞬がたしなめる。ツチノコ探しをすることに決まったときと、立場が完全に逆転している。

「何よ。瞬はいつも、何事も諦めが肝心だって言ってるじゃないの」
美奈がぼやく。瞬はそれを黙殺する。否定できないことだよな、

明は心の中でくすりと笑った。

「あともう一回だけ、みんなで作ってみましょう。それでダメなら、諦めましょう」

瞳が提案する。言葉的には、口調に悲壮感を漂わせてもおかしくないものだが、淡々として言った。

「そうしよう」

明も瞳の意見に同調する。瞬も、もちろん賛意を示す。美奈だけが渋っている。

「やるぞ」

構わず、瞬は再び石と格闘を始めた。明や瞳もそれに続く。

「美奈ちゃん、もう一回だけやってみよう」

瞳が石に体重を傾けながら言う。それを見て、美奈もようやく重い腰を上げた。

「せえの」

四人は瞬の掛け声の下、一度に力を入れる。何かが動く。石だ。あそこまで頑固だった石が遂に動いたのだ。

みるみるうちに霧は晴れていく。と同時に、四人を取り囲んでいたものがその姿を白日の下にさらした。

半魚人だった。

「みんな、こつちだ」

瞬が石の据えられていた場所を示しながら言う。そこには、ぽっかりとした穴があった。

「ここに隠れるぞ」

そう言うと、瞬は自ら率先して穴の中にもぐる。どう考えても無理だと明はとつさに思った。しかし、時間はない。逃げ場もない。美奈や瞳も、我先にと穴の中にもぐりこむ。小さく見えた穴だが、意外と懐は深いようで、三人とも何の苦もなく中に入ってしまった。

「何してるの、明君。早く来ないと、つかまっちゃうよ」

瞳が中から、いまだに躊躇している明に声をかける。

半魚人はじわじわと近づいてくる。明は、ついに穴の中へ飛び込んだ。

第十話

「皆さんをお待ちしておりました」

澄ました声がする。誰かと思えば、ツチノコだ。明は煮えくり返るような思いで、ツチノコを見つめる。誰も何も言わないが、おそらく、そこにいる他の三人も同じ思いだろう。

「さあ、次はこっちです」

まるで何事もなかったかのような言い方だ。

「え、次ってどういうこと？まだあるの？」

「もちろんです」

美奈の言葉に、ツチノコはぴしゃりと言った。というよりも、当然のような言い方をした、といったほうが適切かもしれない。

「わたし、もう嫌だ。早く帰りたい」

美奈の我儘が炸裂。いつもなら、それをたしなめて一触即発の空気を招く瞬も、このときばかりは何も言わない。美奈に賛成しているのだろう。なんといいても、はじめからこのツチノコ探しには反対だった人間だ。

「無理です。あなたたちがここに来たのには意味があるのです」

「意味って？」

瞬が聞く。

「役目があるということですよ」

要領を得ない説明だ。そういうことじゃないと思うけど、明は心の中でつぶやく。はたして、瞬の表情に苛立ちが浮かんだ。

「どんな役目かは、私にもよく分かりません」

ツチノコは先回りして言った。

「でも、私についてきてください。そうすれば、役目を果たすことができますから」

「なんか矛盾してるね」

瞳が困惑したように言う。

「ですから、私はある方から遣わされたのです。だから、行き場所だけは、はっきりしているのです」

「ある方って？」

すかさず、瞬が尋ねる。ツチノコは、そこで押し黙ってしまった。釈然としないものが四人を支配する。

「なんで、こんなことしてるんだろ……。私もそろそろ真面目に受験勉強をしないとやばいのに」

美奈がため息交じりに言う。そうだよな、明も思う。このままだと、何日も家に帰ることができないかもしれない、という不安が彼を襲う。

「もとはと言えば、お前がツチノコ探しなんていう、くだらない提案をするから悪いんじゃないか。それを今さら、勉強しないとやばいなんて……。ふざけるなっ」

遂に瞬が美奈に対して声を荒げた。

気まずい沈黙が一同に流れる。

第十一話

「ねえ、何か寒くない？」

瞳が最初に沈黙を破った。

「そういわれてみれば、確かに何か肌寒いような」

明も話題を受験勉強からそらす。

「着きました」

ツチノコは相変わらず、ふてぶてしいほどの落ち着いた言い方を
する。

そこは、一面の雪野原だった。いや、傾斜があり頂上もあるから、
雪山だ。今は夏だよな、明の中をそんな疑問がよぎる。

「うわあ、きれい」

美奈の能天気な声がする。

「感心してる場合じゃないだろう」

瞬が言う。そして、ツチノコに向き直り、これからやるべきこと
を尋ねた。

「とりあえず、歩きましょう」

ツチノコも暢気なものだ。本当に大丈夫かな、明は少し不安にな
った。しかし、その気持ちも出さないように気をつける。ここで、
ツチノコにつむじを曲げられては、ますます帰れなくなるかもしれ
ない。

「あれ、地震？」

明が言う。地響きがしている。

「いや、地震というより、雪崩じゃないか？」

瞬だ。そう言われてみれば、雪崩の可能性のほうが高い。明は何
気なく美奈の顔を見た。思ったとおりだ。美奈の表情に恐怖が走っ
ている。

「逃げろ」

瞬がとっさに叫ぶ。雪の波は轟音とともに明たちに迫ってくる。

「皆さん、こつちです」

ツチノコが言う。四人は少し横にそれた場所にある穴へ駆け込んだ。危機一髪だった。雪は彼らを素通りしていく。

「助かった」

明が安心の声を上げる。他の三人にも安堵の表情が浮かんでいる。再び静寂があたりを支配する。

「まだ安心するのは早いですよ。皆さんはこれから大変になるのですから」

妙に暗示的なことをツチノコは言う。わざと不安を煽っているとしか思えない。

ツチノコは穴から出て、また山を登り始めた。四人も慌ててそれについていく。

景色の変化もなく、会話もなく、誰もが押し黙ったままの行進だ。明も、なんとなく何も話す気になれなかった。

「もうじき頂上です」

十五分ほど歩いたところだろうか、ツチノコがおもむろに口を開いた。

「頂上に着いたら、また変なのが出てくるのか？」

「おそらく」

「今度は何だ？」

「さあ、そこまでは私も分かりません」

瞬とツチノコの会話が途切れたところで、彼らは頂上にたどり着いた。見たところ、何も無い。雪の白さだけが、まぶしく光っている。

「本当に何かいるの？」

美奈が怪訝そうな声で言う。

第十二話

「いると私は聞いています」

「誰に？」

と美奈。

「私を遣わした方に」

ツチノコが当然のことを言うように答える。しかし、それが誰であるのか、また何がいるのかまでは教えてくれなかった。

「とりあえず、この辺で休憩にしない？」

瞳が提案する。三人はそれに賛成した。ツチノコは偵察と称して遠くにはっていく。

「ねえ、そういえば湖でもツチノコがいなくなったら急に半魚人が襲ってきたよね」

突然、美奈が言う。不安げな声だった。

「ということは・・・」

明がそこまで言いかけた時、再び奇妙な地響きがあった。

「何かがこつちに来るぞ」

瞬が皆の注意を促す。彼の指の先には、巨大な影がひとつ。

「早く、逃げよう」

美奈が震える声で言う。徐々に後ずさりする。明たちも一緒になって、ゆっくりと後退していく。その場にとどまっていたのは危険だと、誰もが本能的に察知したのだ。

「まずい、こつちに気づいたのかもしれないぞ」

瞬が一同を焦らせるようなことを口走る。しかし、脅してもなんでもない。事実だ。

「走れ」

叫ぶ瞬。走る四人。みんな一緒に、雪に躓きながら逃げる。思うように走ることができない。

影は、みるみるうちに明たちに追いつがる。もうダメだ。明の頭

を観念の思いが走り抜ける。

「うわぁ」

四人は落とし穴にはまった。かなり深い穴だ。影はそのまま穴の上を通り過ぎていく。体が大きすぎて、穴には入らないほどだったのだらう。

「何とか助かったね」

瞳がため息をつく。

「今のは何だったのかな？」

美奈が言う。しかし、それに答えられる者はいなかった。

第十三話

「雪男です」

「そう言われてみれば、そんな感じもしたような……。って、何であんたがここにいるの？」

美奈が驚くのも無理はない。そこにいないはずのツチノコがいたのだから。

「失礼な。いてはいけないんですか？」

ツチノコは珍しく、むつとしたような声で答える。

「だってあんたは遠くに行ってたのに、なんで今私たちと一緒にいるのかな、と思っただけよ。誰もあんたがいちゃいけないなんて言ってます」

なぜか、美奈は初めから喧嘩腰だ。両者の間に鋭い緊張が走る。

「はいはい、二人とももうこれくらいにしたら？」

瞳がいつものようにすばやく間に入る。今回は相手の片方が違うが。瞬は茫然自失と表現すればよいような顔をして、その様子を眺めている。これで少しは美奈との摩擦が小さくなればいいんだけど、明は思った。

なんとか、美奈とツチノコの間緊張もほぐれ、一行はツチノコにせかされるままに次の地へ向かうことになった。

「ねえ、これっていつまで続くの？」

美奈が口を尖らせて言う。ちょうど明も気になっていたことだ。

「次で終わりです」

ツチノコの声は微かに震えている。

「おまえ、ちょっと変じゃないか？どうした？」

瞬が心配そうに尋ねる。もちろん相手はツチノコだ。確かにいらいらとしてみたり、声が震えてみたり、雪男に遭遇して以降のツチノコは持ち前の冷静沈着さを失っているように思われる。明も息を呑む思いでツチノコを見やる。女二人も、何も言わないがその表情

からは不安を読み取ることができると。

「別にどうもしていません」

言葉とは裏腹に、その声は上ずっていた。

「そうか。ならいいけど」

納得しているような言葉を言うが、瞬の顔は納得していない。しかし、それ以上は何も追及しなかった。

口火を切って尋ねた瞬がそうだから、他の三人もそれ以上のことを聞き出すことをあきらめざるを得なかった。

第十四話

完全な静寂の中を四人と一匹は歩く。黙々と歩く。自分は寡黙だが、誰も何も言わない環境が大の苦手である明にとっては、非常に苦痛な時間だ。だからといって、適当な話題も浮かばないのでなおさらだ。

「疲れましたか？」

ツチノコが哀れむような口調で、振り返って言う。見ると、誰の顔にも疲労の色が見え始めていた。

それもそのはず。彼らは雪男の脅威を脱してから、すでに一時間近くも歩き通しなのだから。

「そろそろ休憩にしますか？」

ツチノコは一方的に語る。しかし、誰も答えない。答える気力もなくているのかも知れない。休憩にしましょう、そう言うツチノコは先に進むのをやめてしまった。

「疲れた」

瞬が腰を下ろして、ぼそりとつぶやく。他の三人もつられて座り込む。

遠くから、黒雲が流されてくる。不穏な空気を発している。明は独特の勘で、それを察した。

「なんか、やばそうな気がするんだけど」

明は、隣に座っている瞳に、声を落として話し掛ける。

「なにが？」

「あの雲」

そう言って、明は問題の黒雲をあごでしゃくる。

「でもさ、ツチノコはちつとも離れる気配がないから大丈夫だよ。きつと」

瞳はさも安心しきったように言う。言われてみれば、その通りだ。前の二回もツチノコが離れたときに、まるで合わせるようにして怪

物が明確に彼らを目掛けて襲ってきたのだった。

「そうだね」

瞳の言葉を聞き、明もすっかり安心してしまった。

黒雲はもの凄い速さで彼らの許へ向かってくる。どうやら、雷を伴っているようだ。

「おい、あそこに非難したほうがいいんじゃないか？」

瞬がみすばらしい小屋を指差しながら言う。

「そうね、私もそう思う」

珍しく、美奈と瞬の意見が一致した。雨でも降りそうだな、と笑いながら明が考えていると、本当に雨が降ってきた。みるみるうちに土砂降りに変わっていく。

明たちは小屋へ駆け込む。しかし、ツチノコだけは雨の中に残っている。いくら促しても、そこから動こうとしなかったのだ。

「変なやつ」

瞬がぼやいている。

「さっき明君が言ったことって、このことだったのね」

「このことって？」

「雨が降りそうだから、やばいんじゃないかってこと」

瞳は非常に感心したような様子だ。しかし、別に明は具体的にどうなると考えていたわけではない。ただ、何か良くないことが起るのではないかと漠然と思っていただけなのだ。

「あ、うん。まあね・・・」

いまさら本当のことも言えず、明は曖昧に答えることしかできなかった。

第十五話

雷がツチノコの上に落ちた。まるでスローモーションを見ているような光景だった。

激しく大地が震える。煙が巻き起こる。やがて、煙とともに轟音も消え、雨の単調な音だけの世界に変わった。

「ツチノコは？」

美奈が叫ぶ。なるほど、ツチノコの姿はどこにも見当たらない。非常にゆっくりと時間だけが流れた。

声だけが聞こえてきた。ツチノコの声だ。誰かと話している。

「ですから、…様、彼らには帰らなければならぬ場所があります。待っている人がいます。切り開かなくてはならない未来があります。どうか見逃してあげてください」

「だめだ。お前はここまで余に従っておきなから、裏切ると申すのか？」

「いえ、決してそのような大それたことは致しません」

「ならば、そこをどけ。余自ら、ここに迷い込んだ不届き者を始末してくれん」

「どうか、そこを思い・・・」

「うるさい。裏切り者！」

会話はそこで途切れた。同時に、何かが爆発する音が聞こえた。

雲の中から、ずんぐりしたものが落ちてくる。それがツチノコであることに気づくまで、大した時間を要しなかった。ツチノコは傷だらけの姿で、明たちの足元にばたりと落ちた。

「ひどい。誰がこんなことを・・・」

美奈がつぶやく。

「たぶん、さっきこいつと話してた奴だろうな。気をつける。そいつの狙いは俺たちだ」

瞬が冷静に分析して警告する。

「ツチノコを連れて逃げましょう」

「そうそう。早く逃げよう。戦ったって、勝てっこないんだからさ」
瞳と明が口々に逃げることを提案する。しかし、状況はあまりに切迫しすぎていた。

「もう遅い。逃げられない」

いつものような断定口調で、瞬は諦めを口にする。

雲の中から、巨大な竜が出現した。雷を伴っている。

第十六話

竜は、一直線に明たちのもとへ向かってくる。彼らには武器もなければ、何らかの特殊な能力もない。普通の高校生なのだから。

じつと動かなかったツチノコが、ごそごそと動き始めた。

「ここは私に任せて、早く逃げてください。私が時間を稼ぎますから、そうすれば、逃げ切れるはずですよ」

「無茶言っな。だいたいお前みたいなやつが、どれくらいあいつを食い止められるっていうんだ」

瞬が声を荒げる。だが、明はツチノコの好意を素直に受け取りたかった。それ以外に打開策は浮かばないのだから。それは、瞬にしても同じだったのだろう。一度は拒否したものの、すぐに思い直したように、頼む、と言った。

明たちはひた走りに逃げる。ツチノコの努力を無駄にしないためにも、少しでも遠くへ走る。

「お願いです。彼らのことは見逃してやってください。何でも、あなたの言うことを聞きますから」

「うるさい。裏切り者の言うことなんて信用できるか！」

爆発音がする。もう駄目かもしれない、明たちの希望は打ち砕かれる寸前だ。

「私は裏切っただけではありません。しかし、ずっと彼らと行動を共にしていたら、かわいそうになっただけで済んでしまっただけです」

「それを裏切りというのだ。はじめは、あの不届き者どもを抹殺するのに手を貸していたではないか。それをなんだ。今になってかわいそうになっただけだ。笑わせるな」

「彼らは不届き者ではございません。一緒に行動していて分かったのです。何も来たくて来たわけではないのです」

ツチノコが必死に懇願している声が、明たちの耳にも入ってくる。「来たかったとしても、来たくなかったとしても、ここに来てしま

ったことには違いないのだ。あの者たちには消えてもらおうしかない。もし、お前がどうしてもわしの言うことに賛成できぬのなら、お前も一緒に消えてもらおう」

残酷な声あたり一面を震わせる。稲妻が四人の後ろを激しく走る。焦げくさいにおいが彼らの鼻に入ってくる。

「まずい。たぶんツチノコがやられたんだ。もっと早く走ろう。そうしないと俺たちも死んじまうぞ」

瞬が息を切らしながら、しかし冷たいほどの冷静さで言う。

「もう私、走れない」

「おい、美奈しつかりしろ」

よろめく美奈を瞬が励ます。

「見て。あの穴よ」

瞳が走りながら正面に見える洞穴の入口を指で示す。

「あそこが多分出口よ」

そして喘ぎながら付け足す。四人は気力だけで走った。もう限界だ、と思ったときだった。

「次はお前たちだ。一撃で始末してくれる」

酷薄な竜の声。落ちる雷。真っ暗になっていく視界。

落雷の激しい音がする。何かが彼らの頭上を守る。煙が立ち上る。

気がついたとき、彼らは蛇穴の入口に立っていた。

「僕たち、生きてるの？」

明が信じられない思いで誰にともなく尋ねる。

「みただいな」

「つてことは、私たち助かったのね」

「でも、ツチノコは？」

瞳が周辺に目を配る。

「死んじやったのかも」

美奈が一瞬の喜びも束の間、寂しげに言う。

「おい、お前、手に何持ってたんだ？」

瞬が美奈の手に握られている紙に目をつけた。
「何だろう。・・・ツチノコの手紙だ」
夕焼けが、深い夏の空を赤く染めていた。

第十六話（後書き）

久しぶりにこういう話が書きたくなくて、衝動的に書きました。結構肩の力を抜いて書けたので、書いていて楽しかったです。少し子供っぽい雰囲気の商品でしたが、最後まで読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1815e/>

ツチノコの山

2009年3月24日09時28分発行